



ある犬の回想



b-svaha

あるときボクは、ボクの背丈より何倍も高い、溝に落ちてしまった。

そこは、山が迫る水田地域のどこかにあった。

「しゃぼ、しゃぼ、しゃぼ、しゃぼ…」

落ちたところも、そこからいくら前に進んでも、

冷たい水がだんだん増えるばかり。

きれいだけど、ボクは水なんかほしくなかった。

飢えて食べ物を求め、水路に沿ってうろうろしていたら足元を取られたのだから…。

ボクの痩せ細ったグレーの体で、いくら前の手を堤にかけても、高すぎて後ろあしで跳ねられなかった。

惨めにやせ細ったボクの体は、色も手伝って、まるでドブネズミみたいだった。

空腹な胃袋は、ボクのきゃしゃな体を妙に重くして、背骨を小刻みに震えさせた。

進んだり戻ったりを繰り返しても、這い上がれるところは見つからなかった。

ボクは、犬の人生で最も悲嘆にくれていた。

(ここで、ボクは召されるのかな…)

まだ、大人にもなりきれしていないのに…

素敵な女の子とだって、出会いたかったのに…)

きれいな水に映った、

ドブネズミのようなボクの顔をぼんやり見ていると、

後ろの方から声がした。

人間だった。

溝に渡した板の上から、ボクを見て叫んでいた。

振り向いたボクは、しゃぼ、しゃぼとその人に向ってふらふら歩き出した。

ボクは、人は苦手だけど、その人は違って見えた。

その人は、橋を降りて靴のまま水に入り、ボクに向って歩いてきた。

「きみ、もう大丈夫だよ…

こんなに震えて…。

とても冷たかったんだね…。

さあ、怖がらなくていいんだよ」

その人は、手の甲をボクの鼻先に向けてそっと差し出し、

優しく頭を撫でてくれた。

なぜだか、その人は、

震えるボクを見て、涙を流した。

その人は、ボクの冷え切ったお腹にそっと手を置くと、

ゆっくりとボクを引き上げ、芝草の堤の上に、ボクを降ろしてくれた。

ボクは大きく全身を振るい、冷たい水を吹き飛ばした。

すると、急にお腹が空いたので、またクンクンと地面や草の匂いをかぎ出した。

ボクは、食べ物を探すことで、もう頭が一杯になっていた。

だから、その人に、一言のお礼も言うことなく、さよならしてしまった。

親に教わった、まともなお別れの吠え方もせず、

その人の視線を濡れた背中に感じながら、歩き去ってしまった。

そのあとボクは、元の犬の人生に戻った。

あの時ボクを助けた人間は、やはり神様だったに違いない。

いや、神様は、初めから人間なのかもしれない。

ボクは今、そう感じている。